

## ロシアの作家とチェチェン

— A・A・マルリンスキー（ベストゥージェフ）の生活 —

藤 沼 貴

### はじめに

私は1999年（第9号）の本誌に「ロシアの作家とチェチェン— A・S・グリボエードフの場合—」という小論を発表した。この小論は、その序文で説明したように、もう少し規模の大きい論考の一部分の簡略な見取り図であった。

ここで提出するA・A・マルリンスキー（ベストゥージェフ）についての小論も、やはり同じ大きめの論考の別の部分の見取り図である。前回と同じく少数の資料をもとにした素描にすぎないが、将来のまとまった論文執筆の責任を自らに負わせるために、あえて衆目にさらすことにした。

素描とはいっても、カフカースにかかわる作品が「グルジアの夜」の断片しか残っていないグリボエードフと違い、マルリンスキーには「カフカース物」と呼ばれる相当数の作品があり、それはマルリンスキー個人とカフカースの関係にとってばかりでなく、カフカース戦争全体やロシア文学全体にとっても重要な作品群である。その作品群を一瞥するだけでも、十分に独立した労作になるであろう。そこで、この小論ではかれの生活と実際の活動に焦点をしぼり、作品についての言及は必要最小限にとどめることにした。

A・A・マルリンスキー（ベストゥージェフ）について述べる場合、まず、

名前の表記について一言しておく必要がある。

かれの本名はベストウージェフ。マルリンスキーはペンネームである。かれは1811年軍務につき、近衛竜騎兵連隊に編入されたが、1816年に配属された中隊がペテルブルグに近いペテルゴフ郊外のマルリに駐屯しており、その地名にちなんでペンネームが作られた<sup>2</sup>。しかし、この筆名が恒常的に使われたわけではない。1825年のデカプリスト事件で逮捕流刑されるまでは、小説は本名のベストウージェフで書かれ、詩の署名には、当時の習慣にしたがって、A.B.という本名の頭文字だけ、あるいはベ—フなどの本名の省略形が使われることが多く、無署名の場合もあった。マルリンスキーや、その省略形と思われるA.M—yが使われるのはまれであった。

デカプリスト事件で逮捕流刑後、1830年から執筆活動が再開された時、短期間だけA.M.という署名が使われた。これはアレクサンドル・マルリンスキーの頭文字に違いない。それからまもなく1831年に発表された小説「ベロゾール中尉」でA・マルリンスキーが使われ、それが定着した<sup>3</sup>。作品集も1832～34年の第一版は無署名だったが、1835年以降のものはA・マルリンスキー作品集と銘打たれている。9ページで触れるように、ベストウージェフという名があまりにも濃厚にデカプリスト事件を思い起こさせ、それは当時としては好ましいことではなかったので、ペンネームが使用されたのであろう。

筆名や通称が固定的なものであれば、一貫してそれを使うのが当然である。ゴリキーをペシコフ、スターリンをジュガシヴィーリと言っても混乱を招くだけである。しかし、マルリンスキーの場合は作家としても、本名と筆名の両方が使われているし、デカプリストとしての活動の範囲では、自他ともに本名のベストウージェフを使っていた。

かなり多くの場合に、ベストウージェフ＝マルリンスキーという複合形が使われており、一時はこれがほとんど固定した観さえあった。しかし、ロシ

ア人ならともかく、われわれ外国人はこの形をリムスキー＝コルサコフ、サルトウイコフ＝シチェドリンのように、もともと複合形の姓と受け取ってしまうであろう。デカプリスト事件で死刑になった5人の中に、ベストゥージェフ＝リュージンという名があり、これは元来複合形の苗字だが、ベストゥージェフ＝マルリンスキーという姓は実際には存在しない。女性なら結婚前の姓と夫の姓を組み合わせて、クニッペル＝チャーホワのように新しい複合形を作るのが好都合な場合もあるだろう。しかし、本名と筆名を結びつけて（本人は一度もそんなことをしていないのに）、ダブルネームを創作するのは、私としては賛成できない。

この小論はマルリンスキーのカフカース時代に重点をおいているので、最初だけマルリンスキー（ベストゥージェフ）という表記を使い、後はカフカース以前の時期もふくめてマルリンスキーで通すことにした。

## 1 カフカース行き以前

### ① 生い立ちと人となり<sup>4</sup>

マルリンスキー（アレクサンドル・アレクサンドロヴィチ・ベストゥージェフ）は1797年ペテルブルグで生まれた。ベストゥージェフ一門は15世紀初めにその源を発し、15世紀後半にはモスクワ公の家臣として活躍し、17世紀には一門の多くの者が重職についた名家である。一門の中で特権的な地位になった家系の者が、ピョートル時代に（同門の平凡な者たちと自分たちを区別するためか）ベストゥージェフ＝リュージンを名乗った。これは15世紀の祖先のあだ名リューマにちなんだものである。近・現代になってもこの一門はすぐれた人物を輩出し、肉乳牛のベストゥージェフ種、1878年にペテルブルグに開設されたベストゥージェフ女子専門学校、ベストゥージェフ神経興奮液などは、すべてこの一門の人たちの業績である。

マルリンスキーの父アレクサンドル・フョードロヴィチ・ベストゥージェフは退役砲兵大尉で、18人の農奴しか持たない小地主にすぎず、生活も苦しかった。しかし、A・S・ストローガノフ伯爵の推薦で芸術アカデミーと公共図書館の事務長になって生活が好転し、1798年にはI・P・プニンとともに雑誌「サンクト・ペテルブルグ・ジャーナル」を出版し、文化的にも重要な活動をはたすことになった。P・N・ベルコフはこの雑誌を「18世紀最後の進歩的な雑誌」呼んでいる<sup>5</sup>。父の書斎には豊富な蔵書があり、客間には第一級の知識人が訪れ、ベストゥージェフ家は知的な雰囲気にも包まれていた。こうして、マルリンスキーは物質的にも恵まれ、知的レベルも高い環境で成長した。

ソ連時代フリー・メーソンに言及することはタブーだったし、もともとフリー・メーソンは秘密結社で、公開された情報はとぼしいが、今挙げたストローガノフ、プニンの名から推測して、マルリンスキーの父がペテルブルグのフリー・メーソンのスウェーデン派に関係していたことはまちがいない。このグループにはシュワーロフ、ムーシン＝プーシキン、クラークン、ドルゴルーキー、ガガーリン、ストローガノフ、レープニンなど、そうそうたる名門貴族の重臣たちが名を連ねていた。父ベストゥージェフと雑誌を共同出版したプニンはレープニン公爵の庶子で、その苗字の後半を借りてプニンと名乗っていたのである<sup>6</sup>。

マルリンスキーは家庭で初等教育を受けたが、先生の中にはアカデミーの教授もいたという。1810年9歳で鉦山学幼年学校に入学し、数学は苦手だったそうだが、勉強好きで、知識欲旺盛だった。かれの知識欲と研究者的傾向は一生まもたれており、マルリンスキーの一特徴となっている。デカブリスト事件で勾留された後、「どのような学問をもっとも深く究めたか」という査問委員会の質問書にたいして、マルリンスキーは「私が理論的、实际的に勉強しなかった学問の分野は一つもなかったと、僭越ながら申しあげること

ができます」と答えている<sup>7</sup>。

文学的創作は鮎山学幼年学校で始められたとみなされており、最初期の作品の一つは戯曲「魔法の森」で、これは幼年学校の生徒たちが上演した劇の台本だったと伝えられている。しかし、この頃書かれた作品や日記は現存せず、デカブリスト事件が失敗して、マルリンスキーが自首する前に焼却したものとされている<sup>8</sup>。いずれにしても、青年期以降の詩から判断して、マルリンスキーはゲーテやプーシキンのような早熟の天才詩人ではなかったと考えられるので、9歳から13歳までの幼年学校在学中の作品に重きをおく必要はあるまい。

マルリンスキーは1811年幼年学校を中退して軍務につき、見習士官として近衛竜騎兵隊に入隊した。その理由は、1810年に父が49歳で死に、自力で生活しなければならないという個人的な理由もあっただろうが（ベストゥージェフ家には8人の子供があり、年額2000ルーブルの亡父の恩給と農奴34人の領地からの収入で生活するのは容易でなかった）、ナポレオンとの対決がせまりつつあった国際情勢を第一の理由と考えなければなるまい。軍務についてからマルリンスキーは順調に昇進し、デカブリスト事件の時点では二等大尉になっていた。1822年からは軍司令官の副官をつとめ、その前途は洋々たるものだったと、コトリャレフスキーは記している<sup>9</sup>。

騎兵隊に入る直前、かれは海軍に勤務する兄ニコライの軍艦に同乗させてもらい、訓練航海に参加した。この体験でかれは海の魅力にとりつかれ。海軍に入ろうとしたが、数学が不得意だったので断念したという説も伝えられている。自由のイメージにつながる海は、マルリンスキーの重要な文学的テーマの一つで、のちにかれがカフカース行きを切望した理由の中には、海の近くで生活したいという思いもあったと考えられる。

## ②「ロマンチスト」マルリンスキー(1)

マルリンスキーが軍務のかたわら文学的創作をつづけていたことは容易に想像できるが、作品が雑誌や詩文集に発表されはじめたのは1817年、20歳のことで、当時の詩人としては遅いほうであった。

最初の5年間に発表されたマルリンスキーの作品はほとんど詩であった。かれの詩は思想が先走ったり、理に落ちたりして、詩情に欠けるうらみがあった。端的に言えば、すぐれた詩とは言えず、詩人としての評価は当時も現在も高くない。しかし、かれの詩は高邁な理想を格調高い言葉と強い調子でうたい上げることがをめざしており（それがどの程度実現されたかは、ここでは問わない）、その理想は抽象的で観念的だが、幻想ではなく、究極的に実現されるべきものと考えられていた。また、かれにはセンチメンタリスト詩人に見られるやさしいハートへのもたれかかりもなく、ジュコフスキー的なロマン主義者に見られる自己の内面世界の深奥、幻想、神秘の領域などへの没入もない。マルリンスキーの詩は思想的には啓蒙主義、文芸的には古典主義の伝統など（西欧文学では原則的にロマン主義の対立物とみなされているもの）に結びついているが、それは当時のロシア詩の傾向の一つであった。その本質については、かれ自身の論文「ロマン主義について」がもっともよく語っているが、ここではその内容には立ち入らない。

マルリンスキーは1821年に最初の散文作品「レーヴェルへの旅」を書き、創作の中心を詩から散文に移した。1823年以降は詩を書くこともあったが、小説、ルポルタージュ、評論などの散文が主になった。しかも、それが詩よりはるかに読者の人気を博し、かれは散文作家とみなされるようになった。現在でもかれは小説家、評論家として記憶にとどめられているのである。

マルリンスキー自身は自分の「ロマン主義」の本質からして、卑俗な散文作品ではなく、格調高い韻文で真と善の融合した作品を書き、本当の美を実

現したかったのかもしれない。たしかに、かれの散文には型にはまった勸善懲惡や波瀾万丈の作品、メロドラマが少なくない。しかし、かれの散文作品も、基本的には、②で述べたかれの「詩」と「ロマン主義」の延長であった。かれがデカプリストになった源泉もやはりそのロマン主義であった。

### ③デカプリスト事件

マルリンスキーは、周知のように、1824年にデカプリストの秘密結社「北方同盟」に入り、その中心的人物の一人となった。その前後の行動・発言から判断して、かれは政治的活動をする素質をほとんど欠いていた。かれの政治活動は政治的改革をしなければならないという希求とロマン主義に引張られて到達した地点であり、理想より現実を重視し、行動的な組織を作り、力（時には暴力）の行使を辞さないという、一般の政治活動とは性格を異にしている。しかし、これは他の多くのデカプリストにも見られる傾向であり、それはかれらの行動の脆弱さと同時に純粹さを表していた。

マルリンスキー自身の供述によると、1825年12月14日、デカプリスト蜂起の日、かれは午前9時に弟ミハイルの勤務するモスクワ連隊に行った。そこで待ち受けていたミハイル、シチェーピン＝ロストフスキー公爵などとともに、新皇帝に宣誓をしないよう兵士を説得し、かれらを引き連れて、元老院広場に向かった。それを阻止しようとしたフリードリヒ少将をマルリンスキーはピストルで威嚇しただけだったが、シチェーピン＝ロストフスキー公爵がかれにサーベルの一撃をくわえた。

マルリンスキーたちにひきいられるモスクワ連隊が元老院広場に到着したのは午前11時ころであった。それから後の状況はデカプリストの「蜂起」としてよく知られている通りである。モスクワ連隊はピョートル大帝像（いわゆる青銅の騎士）のそばで方形陣と呼ばれる防御隊形を組んで、宣誓を拒んだが、それに同調する部隊はいなかった。ようやく午後1時ころになって、

近衛擲弾兵連隊と近衛海兵隊が合流したが、それでも士官30人、兵隊3000人ほどにすぎず、皇帝に忠実な部隊に数的に圧倒されていた。しかも、指揮官に予定されていたS・P・トルベツコイ公爵は姿を見せず、その場でYe・P・オポレンスキー公爵を代理に選ぶという始末だった。反乱部隊は皇帝に忠実な部隊の威嚇射撃を避けながら、宣誓を拒んでいるだけで、それ以上は何もせず、結局、夕刻には皇帝部隊の散弾攻撃にあって、逃げ散ってしまった。

これが1825年12月14日の元老院広場におけるデカプリスト蜂起の全容である。デカプリスト事件の思想的・精神的な根は深く、この表面的な現象だけを見て、運動全体を過少評価することはできないが、蜂起そのものは子供じみたものにすぎなかった。

マルリンスキーは蜂起の失敗をさとって、いちはやく広場を去り、凍てついたネヴァ川を歩いて向こう岸に渡り、一晚じゅう町をさまよい歩いた末に、翌日の夕方自首し、ペトロ＝パヴロ要塞監獄に収監された。かれは素直に取り調べに応じ、改悛の情を示した。

デカプリスト事件は蜂起の貧弱さとは対照的に、取調べを受けた者579人、流刑や懲役に処せられた者121人、死刑が執行された者5人という大事件になった。死刑になった者の中には、マルリンスキーとともに「北極星」を発行した友人K・F・ルイレーエフや、遠縁とはいえ、一門のS・P・ベストゥージェフ＝リュミンもふくまれていた。近親では、兄ニコライとすぐ下の弟ミハイルがマルリンスキーより重い無期懲役を宣告され、二番目の弟ピョートルは官職を剝奪されて、一兵卒としてカフカース方面軍に追いやられ、精神に異常をきたした。末弟のパーヴェルはデカプリスト運動には直接参加しなかったが、4人もの謀反者を出した家の人間として、逮捕監禁され、流刑同様にカフカースの軍隊に送られた。

この小論の冒頭で書いたように、ベストゥージェフという名はロシアでよ



く知られているが、何よりもまずデカプリスト一家として、人々の記憶に残った。デカプリストの中には兄弟や一族がたくさんいるが、兄弟5人もが連座した例はほかにない。

マルリンスキーはまず1826年8月フィンランドのスラーワ要塞に禁固され、1827年暮れヤクートの流刑地に送られた。禁固中の1年4か月についてはほとんど資料がない。おそらく、語るべきことのとぼしい、わびしい幽閉の月日だったのであろう。

#### ④ヤクートの流刑地で

マルリンスキーは1827年10月フィンランドを去り、ペテルブルグ、イルクーツクを經由して、12月24日、ヤクーツク（北東シベリア）の流刑地に到着し、そこで1829年7月まで1年半以上生活した。ヤクーツクは帝政時代の有名な流刑地で、その生活条件は厳しく、生活改善を要求して再三暴動が起こったほどであった。マルリンスキーの生活も苦しく、しかも退屈だったが、それでもフィンランドでの禁固の日々よりは楽で、本を読むこともでき、創作意欲も次第に出てきた。散文小説をまとめるまでにはいたらなかったが、時折、叙情的な詩をつくった。それはそれとして一定の意義をもっているが、この時期のマルリンスキーの創作は、中絶されたロマン主義者が自分を再確認するためにおずおずとおこなった試みであった。

かれはもっと自分にふさわしい所を求めて、1829年2月、当時ロシア・トルコ戦争の総司令官で、元帥だったI・I・ディービチ＝ザバルカンスキー伯爵に手紙を書き、「一兵卒として軍に参加する」嘆願を皇帝陛下にお伝えいただきたいと頼んだ。そして、「ロシア軍の栄光が古代世界の揺籃とマホメット教徒の棺桶の上に轟きわたっている時に、無為のうちに朽ち果てる軍人の苦しみ」を訴え、「求めるのは利益や恩賞ではありません、求めるのはただ皇帝陛下のご栄光のために私の血を流し、陛下から賜った命を名誉をもっ

て終え、私の亡骸に罪人の汚名が重くとどまらぬためであります」と訴えた。<sup>10</sup>

「陛下に賜った命」というのは、デカプリスト事件でマルリンスキーがいったん死刑を宣告され、死一等を減じられて流刑になったことを意味している。また「古代世界の揺籃云々」という言葉で、かれの希望がカフカース行きであることを明示していた。

この願いは皇帝に伝えられ、皇帝じきじきの裁可で<sup>11</sup>、マルリンスキーは4月13日に一兵卒として入隊を許可され、カフカース軍団に配属された。マルリンスキー自身の言葉によると、この転属が実現したのは実質的にはグリボエードフが総司令官のパスケーヴィチに働きかけた結果であった。<sup>12</sup>グリボエードフはパスケーヴィチの職務上の右腕であり、姻戚でもあった。マルリンスキーはグリボエードフとペテルブルグで知り合い、尊敬していたし、グリボエードフもかれに好意を持っていたのであろう。

流刑地生活がどれほど苦痛で不便だったにしても、しばらくそれに耐えていれば、刑期満了か恩赦で帰国できるはずだった。一方、軍隊に入ってカフカースに行けば死地に飛びこむことになる。しかも、1829年は後述するような理由で、ロシアとカフカース諸族の衝突激化の時期であった。もちろん、マルリンスキーはそれを承知の上で、カフカース行きを選んだのである。

その理由の中には、かれ自身がディーピチ＝ザバルカンスキー伯爵あての手紙に書いていたように、祖国のために尽くして、謀反人の汚名をすすぎたいという気持ちもあっただろう。だが、それ以上に無為より行動を欲し、みじめな生より輝かしい死を望むマルリンスキーのロマンチックな生き方があったと思える。1827年4月かれはヤクーツクから、カフカースにいる弟ミハイルにあてて、まだ見ぬカフカースへの自分の思いをこんなふうに表示していた。「お前はカフカースを見ながら、詩人にならなかったのか。それほど天の近くにいなながら、詩人にならないのは無礼なことだとぼくには思える」

こうしてマルリンスキーはヤクートの流刑地を離れ、1829年8月カフカースに到着、最初の1か月ほどだけトルコでの戦争に参加したが、その後は1837年6月7日、黒海沿岸のソーチ近郊にあるアドラー岬の戦闘で行方不明になるまで、40年の生涯の最後の8年をカフカースで過ごすことになった。

## 2 カフカースで

### ① カフカースの情勢<sup>14</sup>

グリボエードフについての拙論で述べたように、ロシアのカフカース戦争は現在もつづいており、その歴史は数世紀におよぶ。しかし、ロシア史でいう狭義の「カフカース戦争」は1817～64の間の戦いを指す。その起点は1814年にナポレオン戦争が終結して、ロシア軍が東方に相当な戦力を向けることができるようになり、1816年にはA・P・エルモーロフ将軍がグルジア（後にカフカース）方面軍総司令官に任命されて、個別的な討伐戦だけでなく、総合的な軍事・経済封鎖作戦を開始した時である。終点はロシア軍が抵抗の指導者シャミールを1859年に捕虜にし、カフカース全体を制圧したと考えた（実際には、そう簡単にはいかなかった）時である。

この狭義の「カフカース戦争」で1829年は転機であった。この場合、長年にわたって総司令官だったエルモーロフ将軍がデカブリストとの関係のために解任になり、1828年にニコライ一世の腹心パスケーヴィチが新しい総司令官に任命されたということは本質的な問題ではない。また、ロシア・ペルシャ戦争が1826年に、ロシア・トルコ戦争が1829年にロシアの勝利に終わり、その結果、カフカースでのロシアの勢力が拡大して、カフカース諸族との衝突も激化の方向をたどったということは重要だが、二義的なものでしかない。もっとも重要なのはこの時期にカフカースの人々の間に、抵抗戦の

思想的支柱となる、いわゆる「ミュリディズム」が形成され、イマムと呼ばれる精神的、政治的、軍事的指導者を中心に不屈の抵抗が展開されるようになったことである。

ミュリディズムについてはカフカースの人々の間にもさまざまな解釈があって、簡単には理解できない。この複雑な問題について私が何かを言うことはできないし、言うべきでもないであろう。ただ一つ言えることは、ミュリディズムというイデオロギー的な支柱を得て、カフカース人の抵抗がそれまでもまして頑強になったことである。いまだにロシア人の中には、カフカース戦争がカフカース民族の好戦的気質から生じているといった考えがあるが、これは偏見以外の何ものでもない。また、戦争の原因を単純な政治的、あるいは経済的なものとしたり、ミュリディズムを狂信的思想と考えるのもまちがいである<sup>15</sup>。

マルリンスキーはこうしたカフカース戦争の激化ばかりでなく、深化の時期にカフカースに来た。しかも、かれがカフカースでもっとも長く生活したダゲスタンはミュリディズムの温床であった。

## ② カフカースでの生活

### a ダゲスタン行きまで

マルリンスキーは1829年6月ヤクーツクを去り、イルクーツク、エカテリンブルグを経て、ボルガ川を南下、カスピ海沿岸のアストラハンに出て、キズリャルを通過、有名なグルジア軍用道路を通過して、8月にグルジアの首都チフリスに到着した。直線距離にして約6000キロ、2か月の大旅行であった。

チフリスに着くとマルリンスキーは郊外の聖ダビテ修道院にあるグリボエードフの墓を訪れた。かれはマルリンスキーをヤクーツクから救い出し、あこがれのカフカースに移してくれた恩人だったが、この年の1月にテヘランで

悲劇的な死をとげていた。今でこそグリボエードフの墓はきれいに整備されているが、当時は墓石さえなかった<sup>16</sup>。ロシア第一の外交官であり、殉国の士でもあった人の見すばらしい埋葬の地に立って、マルリンスキーは何を思ったであろうか？

マルリンスキーはカフカースに来たものの、最初に配属されたのはトルコ東部のエルズルム（アルズルム）付近で戦っている第41狙撃連隊であった。1828年にはじまった第8次ロシア・トルコ戦争はロシア軍の有利に展開し、トルコ戦最高司令官ディービチ＝ザバルカンスキー元帥（初めはヴィトゲンシュタイン元帥）のひきいる軍は黒海西岸沿いに南下し、1829年6月にはシリストリア（シリストラ）、9月初めにはアドリアノーブル（現エディルネ）を占領して、西側からトルコを侵し、コンスタンチノーブル（現イスタンブール）にせまった。一方パスケーヴィチ將軍のひきいるカフカース方面軍はカフカース内のトルコの軍事拠点<sup>17</sup>を占領し、トルコ本土の東部に入って、1829年6月27日エルズルムを占領した。パスケーヴィチ將軍はそれでカフカース軍の任務は終了したと思ったが、ニコライ一世はさらに西進を命じ、ロシア軍はトルコ本土を東西から挟撃した。

マルリンスキーがエルズルムに来たのは9月3日、第41狙撃連隊に正式に配属されたのは9月19日だったが、実はかれが到着する前日の9月2日には、西部のアドリアノーブルでロシアとトルコの講和条約が締結され、法的には戦争は終わっていた。しかし、東部ではその情報がまだ伝わらなかったためか戦闘がつづき、マルリンスキーは9月26日のバイブルト攻略戦に参加した。それ以上戦闘はなく、かれは10月なかばにチフリスにもどり、士官たちの集まりに出て、かれ一流のプレイボーイぶりを発揮していた。しかし、官等を剝奪された罪人として警戒する者も多かったという<sup>18</sup>。

## b ダゲスタンで

1829年12月8日マルリンスキーはグルジア常備軍第10大隊に配属され、デルベント守備隊の兵士となった。ここでかれは1834年前半まで4年あまり生活した。ペテルブルグは別として、かれがこれほど長く住んだ場所はほかにない。

デルベントは現在のダゲスタン共和国にある小都市で、カスピ海西岸のほぼ中央に位置している。東側はカスピ海に守られ、北はレス山系とウルチャイ川、マジヤリス川、南西はサムール山系とギェルゲルイチャイ川やサムール川などによって三重四重に防御された天然の要害で、5世紀から要塞都市として発達した。とくに町の西端の丘にあるナルイン・カラ要塞は「優しき砦」という意味のその名に似合わず、西北南の三方が絶壁で囲まれた強力な要塞であった。原住民たちは「山は神によって、町は人によって、デルベントは悪魔によって建てられた」と言っていた<sup>19</sup>。1813年からはロシア軍がここを確保し、勇敢なダゲスタンの山民もめったに攻撃してこなかった。

そのため守備隊の活躍の場はなく、マルリンスキーも退屈していた。1830年5月15日かれは作家・ジャーナリストのF・V・ブルガーリンにあてた手紙で「カフカースは詩人とロマンチストのための対象に富んでいますが、運悪く、ここは花も腐臭を発し、ブドウは黄熱病を滴らせています<sup>20</sup>」と嘆いた。

ブルガーリンはマルリンスキーの気持ちを察して、自分がN・I・グレーチといっしょに発行していた雑誌「祖国の子」に原稿を送るようにすすめ、カフカースで書かれた最初の作品「試練」をはじめ、いくつかの作品を掲載してくれた。マルリンスキーもそれに応えて、次々に小説や実録風の作品を発表し、たちまち人気第一の散文作家になった。しかし、この創作活動はかれがカフカースに期待していた輝かしい体験の結果ではなく、退屈で散文的な日常をまぬがれるためのものだったので、かれ自身としては不満であった。

1831年8月からカフカース戦争の指導者カジ＝ムラ（ガジ＝マゴメッド）

がデルベントとブルナヤ要塞の間の地域一帯を制圧するため攻勢に出、マルリンスキーもゲオルギー勲章に値する活躍をしたが、かれがここで発見した戦争はロマンではなく、生々しい現実であり、そのヒーローは華々しい勇士ではなく、血と泥にまみれた寡黙な兵士であった。

それから一年後チェチェンへの大攻勢が計画され、マルリンスキーも参加を志願したが、受け入れられなかった。この戦闘でロシア軍はカジ＝ムラを立てこもったギムルイを占領し、カジ＝ムラを戦死させるという「輝かしい」戦果を挙げた。しかし、この時マルリンスキーはカフカース戦争の実情も、戦争一般の本質も知っていたので、不参加を残念とも思わなかった。

このような状況の中で、マルリンスキーはまたしてもヤクーツク時代と同じような陰鬱な気分になり、創作力にも不安を感じた。1831年12月16日の手紙でかれはこんな風書いている。「……作品の中で私はよみがえります。……たしかに、私はその特別の生を生きています。軽やかな私の想像力はあらゆる形をとります。妖怪変化で、それは皮をかぶります、それは手袋のように私や他人が創造した人物に観念をかぶせます。私は紙の上で笑ったり泣いたりします……しかし、それは一瞬で……私はまもなく冷えてしまいます。言葉が私には実にうすっぺらで、ペンは実にまだるっこく、その上読者は実に遠くにいて、そのハートに近づく道は心の上でも、実質的にも実にたよりなく思えるのです……」<sup>21</sup>

そして1832年12月14日には、7年前のデカブリスト事件を思い出しながら、かれは「きょうは私の命日だ。沈黙と悲しみのうちに私は自分の魂の追悼供養をおこなう」と書いた。<sup>22</sup>

この気分からの救いの一つをマルリンスキーは結婚、あるいは、女性との安定した愛の中に求めたらしい。かれは1833年にこう告白している。「ぼくは女性をあさりながら何年も無駄につぶした。それは大体いつもうまくいったけれども、めったにぼくを幸せにはしてくれなかった。……ぼくの青年

時代は去ろうとしている、だからぼくはその最後の花を摘みたいのだ」<sup>23</sup>

それでもかれは相変わらず女性とのアヴァンチュールをつづけ、それを得意げにひけらかしたりもしていたが、1833年2月23日かれの自宅のベッドの上で若い女性がピストルの弾丸で胸を負傷し、三日目に死ぬという奇怪な事件がおこった。<sup>24</sup> マルリンスキーに殺人の嫌疑がかけられ、取り調べを受けたが、かれ自身は暴発事故と主張し、結局、無罪と認められた。<sup>25</sup>

この女性は下士官の娘で、名はオリガ・ネステルツォーフ、年齢は二十歳、針仕事のためにマルリンスキーのところに時々来ていたという。マルリンスキーの説明では、オリガがふざけてベッドの上の枕に飛び乗った拍子に、護身のためにその下に隠してあったピストルが床に落ち、暴発事故がおこったので、二人の間には特別な関係はなかったということだった。しかし、仕事に来ていた若い女性がふざけてベッドに寝転がったりするわけではなく、私には少なくともオリガの自殺ではないかと思えるが、もちろん根拠はない。

一件落着後もマルリンスキーの隊長をはじめとして、かれの殺人説を噂する者は多かった。一般に、この事件は長く人々の記憶に留まっていたようで、1858年にロシアを訪れたアレクサンドル・デュマ（ペール）はこの事件の話聞き、オリガに捧げる詩をつくったほどであった。<sup>26</sup>

### c 西グルジアへ

この事件の後、もともと嫌気のさしていたデルベントがいっそう居心地が悪くなったのか、マルリンスキーは転属を願い出ることにし、チフリスにいる弟のパーヴェルに助力をたのんだ。<sup>27</sup> その結果、1833年12月に転属が許可され、<sup>28</sup> 病気などのためにやや遅れて1834年4月に着任した（かれがデルベントを去る時、現地民の多くがかれとの別れを惜しんで見送ったという）。新しい勤務先は黒海沿岸に近いグルジア西部のアハルツィへの守備隊で、変わりばえがしないどころか、デルベントの時より生活条件はさらに悪化し、



マルリンスキーの欲求不満と焦燥はますますひどくなった。

かれは西グルジア各地を転戦したり、休暇を得てチフリスやピャチゴルスクで静養もしたが、ささくれ立った神経は癒されなかった。かれは1837年6月に戦死(?)するまで、3年以上も西グルジアですごしたが、その生活はデルベント時代よりはるかに不毛で、作品も「ムラ=ヌル」以外ほとんど書かれなかった。かれはまたまた転属を希望し、1835年6月憲兵総監ベンケンドルフに直訴状まで書いたが、皇帝ニコライ自身が一笑に付し、却下したという<sup>29</sup>。マルリンスキーの焦燥を理解しにくい第三者からすれば、皇帝でなくても、そのたび重なる転属願いを、身勝手か甘えとみなしたであろう。

### ③「ロマンチスト」マルリンスキー(2)

カフカースでのマルリンスキーの創作活動は十分に多産で多彩だった。個々の作品を見ても、「ベロゾール中尉」、「アマラト=ベク」、「ムラ=ヌル」など注目すべきものがあり、文学的な価値はともかくとして「戦艦ナデーダ号」、「水夫ニキーチン」などの人気小説もあった。何よりもかれの創作活動全体が1830年代のロシア文学の重要な現象であった。

また、マルリンスキーはこの時期に、ロシア兵士の「発見」や他者の視点の導入といった画期的な業績もあげていた。レフ・トルストイは1850年代初めに「襲撃」、「森林伐採」などのカフカース小説を書いて、ツルゲーネフが「獵人日記」でロシア民衆のすばらしさを発見したように、自分が最初にロシア兵士を発見したと信じていたが、実はその20年前にマルリンスキーが自分のカフカース小説でそれをしていた。トルストイはマルリンスキーの作品を読んでいたのに、芸術家にありがちな思いこみで、マルリンスキーはロマン主義の色眼鏡でロシア兵士を見ているときめつけていた<sup>30</sup>。

マルリンスキーが「アマラト=ベク」、「ムラ=ヌル」でおこなった他者の視点の導入はロシア文学で空前のものであり、特筆すべき意味をもっている。

この点でもトルストイは苦心惨憺して、やっと1902～04年の「ハジムラート」で成果をあげたが、その70年前に書かれたマルリンスキーの作品をもっと早く、虚心に学ぶべきだったと思わざるをえない。

しかし、マルリンスキー自身は自分の創作にいつも不満であった。その理由は次のようなものだったと私には思える。

- 1 時代の要請である写実的な方法を取り入れながら、自分本来のロマン主義を実現する難しさ。
- 2 生活の中にロマンチックなものが発見できないもどかしさ。
- 3 自分が祖国や生活人の生活から隔離され、文学にたいする要請を実感できない不安。

この小論ではこれ以上に深入りしないが、中絶されたロマン主義者マルリンスキーの悲劇は別の論考で深く追究するに値する問題である。

#### ④ 死の謎

マルリンスキーは1837年6月7日、黒海東岸の（現在ではソーチ保養地帯の一角になっている）アドラー岬の山民討伐戦に参加し、胸を射たれて戦死したとみなされた。しかし、死体は発見されず、捕虜の一人がかれの武器や軍服を持っていただけだという。負傷したマルリンスキーを山民がつれ去ったという説もあり、真相はわからない。<sup>31</sup>

この日、戦闘参加の直前にマルリンスキーは遺書を書いていた。<sup>32</sup> 戦闘に赴く者が遺書をしたための例は無数にある。しかし、マルリンスキーが遺書を書いたのはこの時一回だけで、その遺書通り見事に戦死した。かれの生活はさまざまな点で行き詰まっていたので、自殺同然の突撃をしたのかもしれない。しかし、かれの死は実は山民側に移るための作意だったという考えも成り立つ。実際、その種の「逃亡者」がカフカースに存在していた。カジムラの死後カフカース住民の指導者となり頑強な抵抗戦を展開したシャミール

こそが変身したマルリンスキーだという説までである。二人の共通点は1797年生まれということだけだし、第一シャミールが指導者になったのは1834年だから、マルリンスキー＝シャミール説はまったくの虚説である。

だが、中絶されたマルリンスキーのロマン主義がよみがえる場所はもはやロシアにはなく、カフカースの山の向こうにしかなかったとすれば……という人々の思い、つまり、マルリンスキーの夢を実現させてやりたいという願いがシャミールこそマルリンスキーという途方もない幻想の源泉であるとするれば、私もよろんで学問的真実とやらを捨て、この虚説に賛成するであろう。そして、かれの墓に詣で、花束の一つくらい捧げたい。しかし、死体の見つからなかったマルリンスキーの墓はいまだにどこにもない。

## 注

- 1 藤沼貴 ロシアの作家とチェチェン—A・S・グリボエードフの場合—  
創価大学外国語学科紀要 第9号、1999、p. 15
- 2 Маслин Н.Н. А.А. Бестужев=Марлинский//А.А. Бестужев=Марлинский.  
Сочинения в двух томах. М., 1958, Т.1, С.V
- 3 Голубов С. Бестужев=Марлинский. М., 1938, С.307
- 4 伝記の部分は主として、上掲のМаслин, Голубовのものと下掲のКотляревский  
のものを参照した。
- 5 Берков П.Н. История русской журналистики XVIII века. М., Л., 1952, С.377
- 6 Вернадский Г.Д. Русское масонство. Птрг., 1917, С.10
- 7 Мейлах Б.С. Декабристская идея национального возрождения и русская культура  
начала века.//Декабристы и русская культура. Л., 1975, С.8
- 8 Котляревский Н.А. Декабристы. Кн. А.И. Одоевский и А.А. Бестужев=  
Марлинский. Их жизнь и литературная деятельность. СПб., 1907, С.110
- 9 Там же. С.115
- 10 Там же. С.166
- 11 Там же.
- 12 А.А. Бестужев=Марлинский. Сочинения в двух томах. М., 1958,Т.2, С.646

- 13 *Маслин* С. XL II
- 14 この部分は主として Блиев М.М., Дегоев В.В. *Кавказкая война*. М., 1994 によった。
- 15 ミュリディズムについては上掲書とその注にある文献を参照するのがよい。
- 16 *Бестужев* Соч. Т.2, С.673
- 17 *Котляревский* С.166
- 18 Там же. С.171-172
- 19 *Голубов* С.301
- 20 Там же С.305
- 21 Там же. С.321
- 22 Там же. С.320
- 23 Там же. С.323
- 24 *Котляревский* はこの事件を1834年のこととしているが(С.180)、他の資料から判断して、1833年が正しい。
- 25 *Бестужев* Соч. Т.2, С.646
- 26 *Голубов* С.327
- 27 Там же. С.330
- 28 *Котляревский* С.166
- 29 *Бестужев* Соч. Т.2, С.719
- 30 *Толстой Л.Н.* Полное собрание сочинений. М., Л., Т.3, С.22,215
- 31 *Котляревский* С.213-215
- 32 *Бестужев* Соч. Т.